

世界文化遺産登録目前の佐渡島

本誌編集部

佐渡には、四百年以上にわたって採掘が続けられてきた金銀山とその鉱山技術の変遷を伝える遺跡が数多く残る。二〇二二年二月、これら遺跡の世界文化遺産登録を目指し「佐渡島の金山」の名称で、ユネスコへ推薦書が提出された。今回は、遺産登録を見据えた地元二団体の取り組みの一端について紹介する。

住民機運を高め世界遺産登録を

(一社) 佐渡を世界遺産にする会

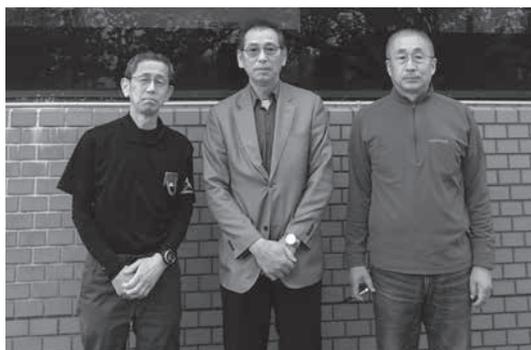
事務局長 庄山忠彦

佐渡を世界遺産にする会の概要

二〇〇四年の市町村合併以前から、

世界遺産候補の構成資産である西三川砂金山(真野町)、鶴子银山(佐和田町)、相川金銀山(相川町)については、各町村が中心となって調査を行なっていたが、佐渡市の誕生は全島的に世界遺産運動を進めていく上での大きな契機となりました。

佐渡金銀山の世界遺産登録に向けた新潟県の取り組みについては、本会の会長も務める中野洗⁵県議会議員が、一九九六年に議会で質問しています。実際に県が動き始めたのは二〇〇五年で、翌年、県に世界遺産登録推進室、市に世界遺産推進課が設けられました。本会は、市民団体「世界文化遺産を考える会」(一九九七年設立)と相川地区の住



左から佐渡を世界遺産にする会の庄山事務局長、金子企画事業部会長、齋藤総務副部会長。

民が中心の「佐渡金銀山友の会」(同二〇〇三年)の合流により〇七年に発足しました。本会の会員は、島外の方も含めて個人会員一三〇〇、法人会員二五〇ほどで、年一回、佐渡で総会を開催しています。私はもともと学校教員で、二〇一八年に真野小学校長を退任したあと、本会事務局長に就きました。

遺跡の保全・整備と住民機運の向上

佐渡で産出された金銀は、鉱山から積み出し港（小木）までの街道を通り、島外へ搬出されました。本会では、佐渡奉行所であった相川から、小木までの「金の道」を実際に歩くイベント「御金荷の道」を二〇一四年から継続して企画しています。本年三月には「世界遺産国内推薦祝いイベント」を開催しました。ガイドの会、商店の会、支所など一〇以上の関係団体に集まっていたが、世界遺産の登録に向けて改めて一丸となったところです。当日の夜には、提灯を持って相川地区を練り歩きました。

また、県内の小学生を対象とした「子どもサミット」を催し、登録に向けた保全活動や宣伝活動をどう展開すべきかを考えています。さらに、市内の小学校への出前授業（市事業）では、本会役員が交代で講師を務めています。

これらの事業を通して、地道に遺跡

を保全・整備していくことの重要性も実感しました。予定されているイコモスの現地調査では、住民機運の高まりに加え、遺跡周辺の清掃や草刈りなどの整備も評価ポイントで、各種媒体を通じて、整備作業への参加を市民に呼びかけています。

可能性を秘めている佐渡島

世界遺産登録へ向けては、資産の「保存と活用」に取り組む必要があります。これは結果的に観光面でのメリットにもつながります。

例えば、「佐渡相川ふれあいガイド」（会長・齋藤本恭本会総務副部長）をはじめ、島内各地区にガイドの会がありませんが、これまでは観光バスでめぐるルートのみで、街中をゆっくり歩くようなプログラムはなかったと思います。最近、個人客を中心に街歩きのニーズが高まってきており、これに対応するガイドの育成が急務となっています。

人数確保はもちろん、ガイドみずからが興味をもって、地域のさまざまなことを学ぶ「スキルアップ」も重要です。相川のガイドは二〇一九年にオープンした佐渡金銀山ガイダンス施設「きらりうむ佐渡」を拠点に活動しています。世界遺産登録されている他地域を見ると、一時的に観光客が増えるもの、それを維持することが課題となっており、白川郷（岐阜県）などの好事例から学ぶことは多々あります。佐渡は日本ジオパーク、世界農業遺産（ジラス）への認定でも知られており、多様なニーズに答えられる島です。現在のアクセスは航路のみですが、航空路が再開されると首都圏を含め多くの方が訪れやすくなる点も強みです。

まずは是が非でも世界遺産に登録されてほしい。登録自体は、国際情勢やコロナの流行などにも影響を受けませんが、私たちは今できることに精一杯取り組んでいきます。

孫の代まで続くまちづくりを

(一社) 相川車座 代表理事

岩崎 元吉士あきよし

まちづくりの実働部隊

相川出身の私は五年ほど前、「孫の代まで商売を続けるまちにしよう」を合言葉に、相川商工会青年部を中心とした「佐渡國相川あきんど会」を立ち上げ、初代会長に就任しました。同会ではまちづくりのアイデアは出るものの、メンバー全員が別に本業を持つ中で、マンパワーや資金の不足のため、なかなかまちの活性化までには至っていませんでした。

二〇二〇年七月、(一社) 佐渡観光交流機構(以下、佐渡DMO)「※」、(株)新潟日報社、古民家活用による地域づくりで実績のある(株)N.O.T.Eの三者が「佐渡地域における歴史的資源を活用した地域活性化に関する連携協定」を結びました(同年十二月に佐渡市が加わり四者協定)。三者協定の説明会では、

昔の賑わいを取り戻して、「一〇〇年後の子孫につながるまちづくり」を目指すという話がありました。「これは、まさに私たちが目指していたものだ」と感心し、懇親会で(一社)佐渡しまづくり機構(佐渡DMOとEssa「新潟日報社とN.O.T.Eが共同出資したまちづくり会社」が出資・参加)の雨宮隆三事務局長と意気投合したことが「相川車座」の活動につながっています。

「相川車座」は住民がまちづくりを語り、それを実行に移していく組織(一般社団法人)として二〇二一年に発足しました。先の四者が立ち上げた地域活性化プロジェクトの実行部隊でもあり、相川町の各分団(自治会)に核となるメンバーがいて、地域課題について話し合っています。また、別組織として株式会社相川車座も設立しています。株主の半分は我々役員など町のメンバー、もう半分は島づくり機構で、銀行などから融資を受けてビジネスとしてまち



(一社)相川車座の岩崎代表理事(右)と雨宮事務局長。岩崎さんが経営する「オケサバーBUNZO」前にて。

づくり開発事業、イベント企画などを実施していく予定です。

市の地域づくりは、旧市町村単位にある支所、行政サービスセンターが中心となり地域のニーズを束ねながら進めていく形をとっており、本会は相川支所にバックアップしていただい

ます。私たちの活動は同支所が毎月発行する広報誌「まちづくりあいかわ」で、住民の皆さんへ伝えられています。最近では、地域の方から頼られることも多くなってきました。私たちの活動が、住民の皆さんの「自分たちがやっていかなければ」という意識づけにつながれば嬉しいです。

古民家の活用と移住者の受け入れ

相川金銀山と佐渡奉行所を結ぶ「京町通り」^{まち}は、かつて鉱山関係者の住居や多くの商店が並んでいました。今なお残る趣ある景観は、国の重要な文化的景観に指定されています。

一方、近年では空き家が増えていきます。そこで私たちは、これらを改修し、宿泊施設として事業を行なっていく計画を進めています。相川全体を分散型ホテルに見立て、街中にフロントデスク機能を持たせた施設を整備することで、点在する空き家を宿として活用す

るものです。周囲に立地する個性的な土産物屋や飲食店を活かし、宿泊者の求める機能を地域全体で補完し合うことで、相川に深く関わるファンを増やし、関係人口の創出や、移住の動きにつなげていければと思っています。

登録の動きをまちづくりの追い風に

私は「多様性」こそ佐渡の魅力だと思っています。この島には百以上の集落があつて、それぞれに固有の地域文化があり、暮らし方が異なります。島内の地域間連携は重要ですが、島内の一にブランドイングするばかりではなく、住民や島を訪れる人がみずからの興味や関心に応じて、地域を選択できる島であつてほしいと思います。

私はかねがね「未来の子どもたちのためのまちづくり」をすべきだと考えてきました。世界遺産登録への動きにより、佐渡に多方面からの注目が集まっている中、通常であれば一〇年かか

る事業が、さまざまな追い風を受けて数年で進んでいるように感じています。例えば、相川地区の観光スポットの一つである北沢浮遊選鉱場跡は、SNS映えスポットとして多くの観光客が訪れますが、写真を撮影して一〇分程度で帰ってしまう方がほとんどです。

伝統工芸の無名異焼^{むなな}の窯元もあるこのエリアに、私たちは観光客が立ち寄れる新たな拠点を整備しています。そこでの店舗運営者を確保することができたのは、登録の動きがあつたからこそだと思っています。

外部からの協力が得やすい、この機会をどう活かすか。みんなで知恵を出し合い、相川を元気なまちにすべく、活動していきたいと思っています。

（収録：二〇二二年四月二三日、写真と文・佐伯）

※詳しくは本誌二五八号参照

